

たぶんかきょうせいしゃかいづくりすいしんじぎょうほうこくしょ
多文化共生社会づくり推進事業報告書

1 いたくぎょうむめい がいよう
1 委託業務名・概要

(1) 業務「ぎょうむ たげんごしゆぎ たぶんかしゆぎ もとづいた らてんあめりかけいおやこ たいしよく
総合的学習支援活動」

(2) がいよう じぎょう ようやく じぎょう もくてき
概要（事業の要約・事業の目的など）

とよかわししゅうへん ざいじゅう らてんあめりか けいがいこくせきじゅうみん しゅよく たいしよく
豊川市周辺に在住するラテンアメリカ系外国籍住民を主要な対象とし、
らてんあめりかけいじどう かかえる げんご ぶんか ちが きいん がくしゅうじよく
ラテンアメリカ系児童がしばしば抱える、言語や文化の違いに起因する学習上の
こんなん かいけつ もくてき にほんごがくしゅうしえん ぼごけいしよくしえん ぶんかたいけんきかく
困難を解決することを目的に、日本語学習支援・母語継承支援・文化体験企画・
しんろせつめいかい かいさい
進路説明会を開催した。

2 じっしじぎょう
2 実施事業について

(1) じっしじき へいせい ねん がつ にち にち へいせい ねん がつ にち きん
実施時期 平成19年 7月 1日（日）～平成20年 2月29日（金）

(2) じっしばしょ とよかわししゃかいふくしかいかん とよかわしきんろうふくしかいかん
実施場所 豊川市社会福祉会館、豊川市勤労福祉会館

(3) じぎょう ぐたいてきないよう
事業の具体的内容

・ すべいんご ぼるとがるごきょうしつ にほんごきょうしつ
スペイン語・ポルトガル語教室および日本語教室

とよかわらてんあめりかさーくる さーくるめんばー ふぼ ぶんたんきん ざいげん
豊川ラテンアメリカサークルでは、サークルメンバー（父母）の分担金を財源
かこ ねん がくしゅうしえんかっどう ぼご けいしよくごきょうしつ
とし、過去4年にわたり、学習支援活動として、母語・継承語教室と
にほんごきょうしつ かいさい ふぼ ふたんかじゅう へいせい ねんど
日本語教室を開催してきた。父母の負担が過重にならないように、平成19年度
まいつきだい だい だい どようび かいさい だい どようび やすみ こんかい
は毎月第1・第2・第3土曜日に開催し、第4土曜日は休みとしている。今回、
いたくじぎょう だい どようび かいさい かのう ひ ひよく ふたん
委託事業として第4土曜日にも開催が可能となり、この日は費用を負担するこ
さーくるめんばー およ いがい ちいきざいじゅう らてんあめりかけいおやこ
となく、サークルメンバー及びそれ以外の地域在住のラテンアメリカ系親子が
さんか こうりつがっこう かようじどう ぶらじるじんがっこう
参加できるようにした。公立学校に通う児童だけでなく、ブラジル人学校に
かようじどう さんか
通う児童も参加した。

・ ぶんか しゅうかんだいけんこうざ
文化・習慣体験講座

にほんぶんか じっさい たいけん しゅがん おちゃ わふくきつ
10/21 は日本文化を実際に体験してもらうことを主眼とし、「お茶」「和服着付
ふるしきづかいがたこうざ おりがみ にんぎょうげき えほんよみきかせ
け」から「風呂敷使い方講座」「折り紙」、さらに「人形劇」「絵本読み聞かせ」
おかりな がっしよく ないよく いっけん にほんぶんか
「オカリナと合唱」を内容とした。一見するとあまり日本文化らしくないも
ふくまれ べるー ぶらじる ぶんか とく がっこうぶんか
のも含まれているが、ペルーやブラジルの文化（特に学校文化）にはないもの
じどう ふぼ たいけん ぶんかてき ぎやっぶ う いと
を児童や父母に体験してもらい、文化的なギャップを埋めることを意図した。
らてんあめりかぶんかしょうかい しゃしん びで お ぶらじる べる
2/17 はラテンアメリカ文化紹介として、写真やビデオによるブラジルとペル

一、^{れきしせつめい}歴史説明、^{けいしょく}軽食の^{ていきょう}提供、^{みんぞくいしやう}民族衣装の^{てんじ}展示、^{おんがく}音楽や^{おど}踊りの^{ひろう}披露などを^{おこなった}行った。
この^{しょうがい}紹介を通じて、^{じどう}児童が^{じぶんたち}自分達の^{るーつ}ルーツをより^{くわ}詳しく^し知る^{きかい}機会を^{ていきょう}提供
ただけでなく、^{ちいき}地域の^{にほんじん}日本人に^{たいして}対しても、^{おな}同じ^{ちいき}地域に^く暮らしている^{ひとびと}人々が^も持つ
^{こと}異なる^{ぶんか}文化への^{りかい}理解を^{ふか}深めて^{きかい}もらう^{ていきょう}機会も^{ていきょう}提供できた。

・「^{らてんあめりかけい}ラテンアメリカ系の^こ子どもの^{しょうらい}将来を^{かんが}考える^{つどい}集い」

^{にほん}日本の^{がっこうせいど}学校制度や^{てんけいてき}典型的な^{しんろせんたく}進路選択・^{しよくぎやうせんたく}職業選択についての^{じょうほう}情報を^{ふぼ}父母が
^{ぼるとがるご}ポルトガル語や^{すべいんご}スペイン語で^{にゆうしゆ}入手できないため、^こ子どもの^{しょうらい}将来について^{しんぱい}心配
^ししながらも、^{じゆうぶん}十分に^{けんとう}検討できない^{じじょう}事情がある。そこで、^{いっばんてき}こうした^{じょうほう}一般的な^{じょうほう}情報
^{ぼるとがるご}をポルトガル語と^{すべいんご}スペイン語で^{ていきょう}提供し、^{だいがく}さらに^{しんがく}大学まで^{ぶらじるじん}進学した^{ぶらじるじん}ブラジル人
^{べるーひと}とペルー人を^{まね}招いての^{たいけんたん}体験談の^{こうえん}講演と、^{しつぎおとう}質疑^{おこな}応答を^{きかい}行う^{もう}機会を^も設けた。

3 ^{じっしけつ}実施結果（^{じっし}実施の^{こうか}効果）

（1）^{すべいんご}スペイン語・^{ぼるとがるご}ポルトガル語^{にほんご}教室および^{にほんご}日本語^{きょうしつ}教室

（7/28、8/25、9/22、10/27、11/24、12/22、1/26、2/23）

^{けい}計8回、^{かい}1回あたり^{ふん}180分、^{さんか}参加人数^{にん}延べ 276人

^{ちいき}地域に^{ひらかれた}開かれた^{きょうしつ}教室であり、^{さーくる}サークルの^{めんばー}メンバーにならなくとも^{きがる}気軽に^{たいけん}体験
^{できた}できた点は^{ひじょう}非常に^{ゆういぎ}有意義だったと^{かんが}考えられる。何度か^{なんど}子どもを^{さんか}参加させ^{ようす}様子
^{みる}を見るうちに、やはり^{がくしゅうしえん}学習支援が^{ひつよう}必要だと^{かんが}考えるようになった^{ふぼ}父母が^{つぎつぎ}次々と
^{さーくる}サークルに^{くわ}加わるようになったため、^{とうろくじどうすう}登録児童数が^{にん}15人ほど^{ぞうか}増加した。これは、
^{がくしゅうしえん}学習支援を受ける^う子どもの^{ようす}様子を見て、「^{がっこう}学校に^{まかせて}まかせておけばよい」という
^{かんがえ}考えから「^{おや}親として^こ子どもの^{がくしゅう}学習に^{せきにん}責任を^も持たなければ」という^{かんが}考えへと、
^{いしき}意識が^か変わったとも^{とらえる}捉えることができる。児童が^{じどう}積極的に^{せつきよくてき}学習に^{がくしゅう}取り組む
^{めには}めには、^{がくしゅう}学習に対する^{たい}肯定的な^{こうていてき}態度が^{たいど}家庭内に^{かていない}存在する^{そんざい}ことが^{ふかけつ}不可欠であり、
^{がっこうがい}学校外での^{がくしゅうしえんかつどう}学習支援活動に参加する^{さんか}親子が^{おやこ}増えたことは、^{いみ}この^{じゅうよう}意味でも^{じゅうよう}重要
である。

（2）^{ぶんか}文化・^{しゅうかんたいけんこうざ}習慣体験講座

（10/21、2/17）

^{けい}計2回、^{かい}1回あたり^{ふん}180分、^{さんか}参加人数^{にん}延べ 186人

^{ぶんか}文化が^{でんたつ}伝達される^{ばしょ}場所は、^{おおく}多くの^{ばあい}場合、^{かてい}家庭や^{こみゆにてい}コミュニティである。そのため、
^{かていないぶんか}家庭内文化や^{せつしょく}接触する^{こみゆにてい}コミュニティが^{こと}異なる^{らてんあめりかけい}ラテンアメリカ系^{じどう}児童は、^{にほん}日本

に生まれ育ったとしても、かならずしも日本の文化に馴染んでいるとは限らない。日本の文化に関する経験の不足は、学校での学習にも大きな影響を与える。日本文化に馴染んでいるという暗黙の前提に立つ学習内容がしばしばあられるからである（低学年の国語教科書にでてくる「お正月」「もちつき」、高学年の社会にでてくる「奈良の大仏」など）。着物を着たり、お茶の作法を習うという実際の体験を通じて、自分の周りにある日本の文化に馴染み、日本の文化もまた自らの生活の一部だと認識してもらおうきっかけになったのではないだろうか。

また、自分のルーツに関わる文化についての社会的評価は、児童の自己認識やアイデンティティ形成に大きな影響を与えられ、ラテンアメリカ文化を、固有の価値を持つものとして紹介することは、こうした社会的評価にも肯定的影響を与えうる。とりわけラテンアメリカ系児童が多い地域社会において、この点は意義深いと考えられる。

(3) 「ラテンアメリカ系の子どもの将来を考える集い」

（ポルトガル語およびスペイン語による進路説明会）（12/1）

計1回、180分、参加人数 77人

進学情報を父母らの母語で提供したり、進学体験談を聞く、あるいは進学相談を行うという行事は、愛知県内ではすでに豊橋市・豊田市・小牧市・西尾市・東浦町でも行われているが、豊川市では、少なくとも校区をまたいで開催されたことがなかった。しかし、当日の参加者数から、こうした情報に対する需要があることが明らかになっただけでなく、参加申込者向け事前アンケートおよび当日の質疑応答からは、進学や職業訓練に関する基礎的な一次情報すら、父母は承知していないことも明確になった。

当日は、父母だけでなく、立場や役割を異にする多様な参加者（国際交流協会・教育委員会・国際課・県立大学・県多文化共生推進室・地域の小中学校・他地域で学習支援に関わるボランティアなど）が集まったが、ラテンアメリカ系の（そして外国籍一般の）子どもの将来については、家庭の問題だけではなく、地域の問題として考え取り組むべきだと大卒のコンセンサスが得られたのではないかと思う。

4 事業の特質（工夫した点など）

今回は大きく3つの取り組みを行ったが、すべてをPECLAだけでゼロからつくりあげ
 ることは力量的に不可能であったので、企画実行の段階から、他のボランティア団体や
 個人に協力を仰いだ。このことが、結果的には、あらたな団体や個人とのつながりを
 深めることとなった。例えば、日本文化紹介事業では、職業として着付けを行ってい
 る個人や、絵本読み聞かせ・人形劇をボランティアとして行っている団体とのつなが
 りができた。またラテンアメリカ文化紹介事業では、ペルー人および日本人からなる
 音楽グループや、ブラジル人のカポエイラグループ、豊橋の音楽学校などともあらたな
 関係を築くことができたのは大きな収穫だった。

今回の事業は、個別具体的な内容について、それぞれの成果があることはもちろんだ
 が、総体としては、以上述べたように、地域のボランティア団体や個人とのつながりが
 強まることで、各自がその強みを生かしながら、「多文化共生」という理念を地域社会で
 実現していくための「地ならし」という効果ももったのではないかと考えられる。

5 今後の課題

実施上の具体的な詳細に関しては、いくつか反省すべき点がある。特に事業日程の
 設定については、「学校の日」とは重ならないようにする、あるいは工場労働者が多い
 父母たちのライフスタイルを考慮する（日曜日の事業開催は慎重に検討する）といっ
 た教訓が得られた。

(1) スペイン語・ポルトガル語教室および日本語教室の開催はPECLAの中心的活動
 として、今回の事業により広がった人間および団体関係を活用し、今後も継続して
 いく。また、規模の拡大にあわせて、ボランティアの研修など、質的向上の取り組
 みが必要となってきており、この点にも取り組んでいきたい。

(2) 文化・習慣体験講座の開催については、体験型という点および児童生徒を対象
 にする点は引き継ぎながら、国際交流協会の諸事業に今回の成果を還元していけ
 るように検討したい。

(3) 「ラテンアメリカ系の子どもたちの将来を考える集い」の開催については、今回の
 実施で明らかになった情報需要に基づき、関係機関へ協力を呼びかけ、地域社会
 において継続的に実施していくことを目指したい。

6 たさんこうじこう その他参考事項

- (1) こんかい 今回は委託事業に選定され、そうおう 相応の成果を収めることができたが、せいかがあよ その成果が及ぶ範囲は限られている。たとえば、がくしゅうしえんかつどう 学習支援活動に子どもを参加させたくても、きょじゅうちいき 居住地域と活動場所との距離が大きいので、さんか 参加を断念している父母もいる。今後は、こういき 広域に一つの大規模な活動センターがあるというモデルよりも、しょうきぼ 小規模な活動があちこちで展開され、かつどう なおかつ活動に関わるボランティアやグループがゆるやかに連携しているというモデルのほうが実効性が高いのではないだろうか。そうしたモデルを実現するための関連事業展開を、あいちけん 愛知県には今後期待したい。
- (2) こんかい 今回の事業は多文化共生社会づくり推進事業があつて初めて可能になった。かんしゃ 感謝している。今後ともラテンアメリカ系児童の学習支援活動を継続していくには、ひつづつ 引き続き推進事業のような取り組みが必要だと確信する。